

随 想

エジプト紀行

佐々木 教祐

「エジプトはナイルの賜物である」は紀元前5世紀にエジプトを旅行したギリシャの歴史家ヘロドトスの言葉だが、ナイル川はビクトリア湖を水源とする白ナイルとエチオピアのタナ湖から流れ出る青ナイルがスーダンの首都カルトゥーム近くで合流し、ヌビアの険しい峡谷を抜けてアスワンに達する。アスワンからはゆったりと流れ、カイロから少し下流で2つの支流に分かれデルタ地帯を通過して地中海に注いでいる。アスワン・ハイダムができるまでは、夏にエチオピア高原に降る雨によりナイルは6月頃から9月頃まで増水し、肥沃な土を残して水が引いた秋から冬に麦や野菜などの種をまき、春に収穫した。これが古代エジプトの農民生活のサイクルとなり死生観や道徳、国家観をつくった。このようにナイルの恵みで発展した古代エジプト文明を訪ねて4月18日から8日間エジプトを旅行した。

第1日は関西国際空港からエジプト航空でカイロまで13時間、そこで15ドル払いビザを取得する。日本との時差はサマータイム前なので7時間である。ここから、さらに1時間の空の旅で古代エジプトの都が長く置かれたルクソール(テーベ)に到着した。待ち時間を含めて20時間を超える長い一日であった。

2日目はナイル川畔のホテルで清々しい朝を迎え、ナイル西岸の王家の谷に向かった。私は旅行のとき、いつもソニー製のGPSを携帯して行く。このGPSは15秒ごとにその位置を記録してくれ、20日くらいのデータを保存してくれるので、後から自分の行動をチェックでき、忘れた記憶を呼び戻すのに役立つ。旅行を終えた後パソコンでGoogle Earthに重ねて見るのも楽しい。また写真の撮影時間と合わせればどこで撮った写真かも一目瞭然である。また、遺跡の説明や世界中の旅行者たちの撮った写真も見られる。

さて王家の谷とは新王国時代(紀元前1570～1070年)の王家の墓地で、発掘された順に番号が付けられ、ツタンカーメン王墓は62番目である。最近新しく63番目が見つかり発掘が始まっている。その中でラムセス4世、ラムセス3世、ツタンカーメン

の墓を見学できた。墓の壁面には死んだファラオが神々の世界に到達し、神と手をつなぎ祝福を受ける場面や太陽神ラーとともに冥界を旅する様子などが彩色され描かれていた。墓の建設は生前から秘密裏に進められ、100人くらいの専門家集団が王家の谷の近くの村に隔離され生活していた。ツタンカーメンの墓以外は盗掘にあつてめぼしいものは残っていなかった。後世では王のミイラが盗掘で傷つけられるのを恐れ、神官が別の穴にまとめて隠すなどしていたらしい。その中で黄金のマスクをつけたツタンカーメンの墓だけはなぜか盗掘にあわず1922年ハワード・カーターにより発見された。石棺内の3重棺のうち、一番内側のものは純金であり、外側の2棺は木製で金箔が施されていた。そのほか生前に使っていた玉座やベッドなどおびただしい副葬品も見つかり、この素晴らしい遺品はカイロのエジプト考古学博物館で見ることができた。ただ王のミイラはカーターの遺言により今も王家の谷の墓に眠っている。死後の世界でも現世と同じように楽しい生活ができるようにとの願いから生前使っていたものすべてを墓に納める風習があつたからである。ツタンカーメン王は18歳ころ亡くなつたらしいが、出生や死因について不明な点が多くなぞの多いファラオでもある。

次にハトシェプスト女王葬祭殿に向かった。ハトシェプスト女王はトトメス2世の王妃で妾腹の息子トトメス3世の補佐役をしていたが、彼女を取り巻く高官の支持を受けて壮麗なこの葬祭殿を建設し、女王として君臨するようになった。この神殿の背後にある絶壁の真後ろには王家の谷が広がり、ナイル川を挟んで東岸にはカルナック神殿が位置する絶妙の立地であることが分かる。しかし、神殿に立つ女王の像はひげを生やした男性のファラオとして造られているのを見ると女王の苦悩も見え隠れする。

昼食の後、ナイル川東岸にあるエジプト最大のカルナック神殿を見学する。この神殿はおもに上エジプトの守護神アメン神のためにローマ時代までずっと多くのファラオによって増改築が行われ、巨大な建物群になった。セティ1世とラメセス2世の美しいレリーフに飾られた大列柱室は柱の巨大さ、高さに圧倒された。ここを抜けるとトトメス1世とハトシェプスト女王のオベリスクを経てトトメス3世の祝祭殿、大列柱室から右に折れると聖なる池に続く。また、生命の家、ペル・アंकと古代エジプト人が呼んでいた建物が神殿に付随してあつた。ここで神官や書記が古いパピルスで補修、更新、「死者の書」の編纂、星の観測、医療技術などのエジプト文明を継承していた。古代エジプトの暦は1年365日で12月あり、ひと月30日で残りの5日は新年の前に神々の祝日として追加された。しかし4年に一度の閏年はなかつたので

徐々にずれていった。また労働者の休日も10日に1度あった。

ルクソール神殿はライトアップされているので夕方からの見学になった。ここはカルナック神殿の付属神殿として建てられ、当時はスフィンクスが両脇に並ぶ参道で結ばれていた。入口をはいると正面が第1塔門でここには2本のオベリスクが立っていたが、現在は左の1本だけで、右のオベリスクはパリのコンコルド広場に立っている。

3日目はコンボイすなわち自動小銃をもった武装警察が車列の先頭と後尾につきバスと車の集団を護衛しながらアスワンまで行った。都市間の移動はコンボイに加わらないと許可されない。1997年ハトシェプスト女王葬祭殿で起きた外国人観光客ら61名が殺害された無差別テロ(ルクソール事件)の後の観光客の減少を教訓にこの警備体制ができたとのことである。ガイドの説明では今では形式的になっていると言っていたが、薄気味悪さを感じた。途中エドフでプトレマイオス朝の遺跡であるホルス神殿を見学した。ここの塔門に描かれたホルス神誕生のレリーフは保存がよく、規模も大きく美しい。さらに車で1時間ほど走ると、コム・オンボ神殿に着く。ここはギリシャ風の様式でローマ皇帝アウグストゥスの時代に完成したホルス神とワニの神ソベク神のために建てられた。民衆から腕の良い医者として信仰されていたホルス神を祭るこの神殿の外回廊レリーフにはメス、針、ピンセット、浣腸器具などの手術や治療器具が見られ、外科手術が行われていたことを窺わせる。この後、オベリスクを切り出した古代の石切り場へ行き、切りかけのオベリスクを見学し、さらにアスワン・ハイダムを見学する。このダムは1970年完成し、琵琶湖の7.5倍の広さを持つナセル湖(ダム湖)が造られナイル川の水位の管理が行われている。ここで発電した電気は国内の電力を賄い、余った電気は隣国に輸出しているという。

アスワンの船着場からファルーカ(帆かけ舟)で島のホテルに着く。このファルーカは古代の交通に使われたもので、上流に向かうときは帆で風を受けて進み、下りは流れに任せていた。古代の交通は船が主流であった。

4日目は飛行機でアブ・シンベルに飛び、アブ・シンベル神殿を見学、そのあと飛行機でカイロに飛んだ。アブ・シンベル神殿はナセル湖のほとりにあり、北回帰線を越えスーダンとの国境に近く40度を超える暑さであった。アスワン・ハイダムによって水没するのを避けてユネスコが元の位置より約60m上にそっくり移築したもので世界遺産を創設するきっかけをつくった。この大岩窟神殿を建設したのは新王国時代のファラオ、ラムセス2世(在位、前1279~1212年)で25歳で王位を継ぎ、治世初期にはヒッタイトと戦ったが治世21年相互不可侵協定が成立した。それ以降、戦いは避けカルナック神殿の大増築など国中に多くの神殿を建築した。その中でも最大

の事業はヌビアのアブ・シンベルに崖をくりぬいて造ったこの神殿である。4体のラムセスの大座像(高さ18m)が2対となり正面入口の両脇に居並ぶ姿は圧倒される。また岩窟内の神々の像と並んだファラオの像に1年に2回だけ朝日があたる演出もヌビア地方の統治には効果的であった。

5日目はカイロ近くのギザのピラミッドおよび試行的に作られた階段ピラミッドなどを見学した。有名なギザのピラミッドは砂漠の中にあると思っていたが、カイロの町がどんどん広がりすぐ近くまで住宅が迫っていた。ピラミッドはナイルの西岸に3つ並んでいるが、北から1つ目は4500年前クフ王が造った大ピラミッドで平均2.5トンの石を約300万個積み上げた当時の高さは146.6m、現在は頂上部が9mほど崩壊している。2つ目はカウラー王のピラミッドで父王の大ピラミッドより少し高い場所に造ったため高さが136.4mであるが、一番大きく見える。頂上部には石灰岩の化粧板がまだ残っている。3つ目はカウラー王の息子のメンカウラー王が造ったものでかなり小さい。有名なスフィンクスはカウラー王の葬祭複合体と一体をなすものでクフ王の大ピラミッドのために切り出された岩山(石灰岩)の残りを彫って造られている。実際にクフ王のピラミッドの「王の間」に狭い階段を昇って入ったが、王の間の西端にアスワンから切り出した一枚岩から造った花崗岩の石棺が置かれているのみであった。ピラミッドは何をするためのものなのか? はっきりした証拠はまだないとのことである。ピラミッドの建設に携わった労働者の居住区がギザのピラミッド近くで見つかり、労働者はパン、ビール、肉などの食料を得ながらピラミッドの建設にあたっていたことが明らかになった。すなわち、ナイル川が増水し田畑が水没する時期に公共工事として建設が行われたと言われている。サッカーラまで行きピラミッドの原型といわれる階段ピラミッド、ダハシュールにある赤のピラミッドと屈折ピラミッドも見学した。

6日目は列車でアレキサンドリアに行き、3～4世紀の地下のカタコンベ(共同墓地)と国立博物館を見学した。7日目は初期キリスト教のコプト教教会を見学した後、エジプト考古学博物館を見学した。2階ではツタンカーメンの黄金のマスク、玉座、ベッド、黄金の棺など王墓から出土した素晴らしい品々を見ることができた。ファラオたちのミイラも特別室で見ることができた。いずれもエジプト文明を代表するものばかりでいくら見ても見あきないものばかりであった。夕方、カイロを後にして12時間の旅で関空に帰国した。

(名古屋大学名誉教授)